生する餘地を殘して居る。例へば、三司を離れて茶場司を論じ得ず、流賊と切離して茶賊は考へられず、諸權法と別に茶權があるわけはないが、さればとて三司や流賊權法などの一般的資料をも、本書に加へる事は出來ぬ。網の目の樣な聯關性を有する事を考へれば、資料集は完璧を期し得ないと言ふ事も出來、更に極言すれば、資料集が存在する價値ありや否やと言ふ疑問に迄發展する事になるのである。

こんな亂暴な議論を此所に試みる事は、この名著に對しては當を得ない事なのであるが、資料集ばかりが汎濫して眞の歴史書に乏しい中國にある筆者が、日々行きあたつて居る問題——資料主義に對する疑惑に又も捕はれたるまゝに、此所に附記した謂なのである。佐伯氏が、この資料を中心として多數の名著を發表される事を信じ、私の暴論が雲消霧散する日の近き事を祈つて擱筆する。

〔今堀誠二〕

大唐西域記の研究　上卷

足立喜六著

昭和十七年十二月　法藏館發行

A5判五七五頁　定價　拾貳圓

大唐西域記は、求法僧玄奘三藏が、貞觀三年秋八月長安を出て、同十九年春正月西京に入るまで、西域印度を踏破せる際の、一の見聞錄—紀行といふ意味ではなくて、見聞した諸國の事情を錄したもの、卽ち地志—にして、同二十年七月進獻せる撰述なるは、人のよく知る所である。

本書の研究は、十九世紀後半に、西洋の學者によつて開始され、Stanislas Julien, Samual Beal. Thomas Watters 諸氏が夫々傳譯を出した外、部分的な研究報告も亦多きを算する。他方此の地方の實地踏査も進められ、古地理・古文化に關する知識が大いに發展した。

我國に於いても、明治四十四年七月、京都帝國大學文科大學は、高麗本を底本とし、宋明藏本・本邦古寫本・舊校訂本其他を用ひたる校訂本を出し、大正元年、堀謙德氏は、前記西洋學者の研究を參考すると共に、此等西洋學者に缺けてゐた、佛教學知識も驅使して「解說西域記」を出し、夫々學界を裨益する所があつた。此の二者は西域記研究史上不滅の功績を殘したものであり、其の後大正藏經は、前者の校訂を更に一歩進めたが、今に及んでは、何れも容易に青年學徒の手には入り難いのである。

然るに最近、足立喜六氏「大唐西域記の研究」を刊行せられ、其の「原義を簡明正確に直解して、特に其の地理的關係を考へ、以つて玄奘の旅行の眞相を闡明せん」とせられた。此の本の大體の體裁は、Waters氏以來の說明法に則り、卷一から卷七に至る各卷の、一國の記事を一章とし、其の內容多岐に亘る時は、更に此を小節に分つて標題を附し、各章節は、①句讀返點を附したる本文、②訓み下し文、③此が說明考證を載せてある。但し③は除かれてゐる章節もある)。

今その全體を通讀するに、著者の苦心の跡歴然たるものあるを見る。而も吾人はそこに幾多の不滿なきを得ない。以下率直に私見を述ぶることとする。

第一本文の取扱方についての著者の態度は、大學校訂本が、但諸本の異同を列擧するのみにして「孰の證本を以つて正當と定むべきかを研究」する事は後來の問題として殘してゐるとな

して、是が解決を計らんとしたものと思はれる。其の意圖の壯大にして、著想の自由なる、吾人の感服おかざる所、而も理想の高遠にして、現實の伴なはざるは、吾人の最も遺憾とする所である。私見に依れば、本著テキストは宋本であるが、所々に宋本との異同があるのは、大學本乃至大正藏本を以つて、著者が好む所に從ひ、文字を改變したものである。誤植の少なからざるは、今は述べず。文字の校勘に於て甚だ杜撰なるを覺える。例へば、本書七頁の大地菩薩、九二頁の中陰生の如き、麗本に從ふ事に依つて理解の極めて容易になる點も何故か麗本に從はず、或は又しば〳〵自らの好む所に依つて文字を變改するも其の理由明かでなく、二つながら吾人の極めて奇怪とする所である。また、五一〇頁の基陛、五二二頁の如來歎惜斯何不遇の、基・惜は夫々大學本の誤植に基くものであり、前者は大學本では、正しくは階に作るべく、宋本では、陛階に作つてゐるといふ。而して著者が好む所は、基陛である。後者は大學本では如來歎嘆如何不遇とあるのが正しい。(因みに「如」は、宋本では「斯」に作る。故に宋本に從ふ本著に問題は無いのである)。大學本の不注意なる誤植を以つて、是とする如きは、吾人の考へ及ばない所であるといはねばならぬ。尤も大正藏經本も基階に作つて、宋元明本は基陛に作るとなす。又歎惜斯は歎惜如に作る。大正藏經の往々にして、誤植粗漏あるは識者の等しく認むる所にして、事の此處に至る眞相はほゞ明かである。

第二訓讀

著者が訓讀の方針は、①文字に捉はれる事なく、意義に據つて文を讀むこと、②支那の學者は古文を解するのに字數を揃へて句切る通弊がある。これは唐代にも六朝の駢麗體が因襲せられて居るとの見解に出たものであらう。玄奘の文章は決して斯る形式に捉はれたものではない。句讀點を加ふるには最も慎重に考慮が拂はれるべきだといふにある。

以下此の見解に基づいたる訓讀に就いて吟味をする。先づ八六頁

氣序寒烈風俗剛獷多衣二皮褐一亦其所レ宜。文字風教貨幣之用同二親貨遷國一。

先づ著者の訓讀を聞かう。「氣序は寒烈、風俗剛獷にして多く皮褐を衣たれども亦その宜しき所なり」。所宜は物産を指す。故に句點は四字上へ戻る。

次に二四八頁

池沼十數映帶。左右彫レ石爲レ岸、殊形異類。激水清流沿洑漂注。云云

とある始めの十二字の讀方であつて、これこそ、著者が所謂「最も慎重」な考慮の下に句讀を切られた好標本の一つである。卽ち玄奘の文を四六文と見てはいけないとの著者の前述の主張に由來するのであるが、何故に然るか全く見當がつかない。斯の如き例を若し好んで列擧するならば、實に枚擧に遑ないであらう。試みに二三の例を擧げて、著者が訓讀方針の誤れる事を示したに過ぎぬ。而して猶ほ一言すべきは著者が充分な用意なくして、殊に佛教關係の準備不充分にして本研究に從はれ、それの本著に影響する點の少くない事は極めて遺憾とする所である。

第三說明

1、地理的方面。

玄奘の擧げた土地と其行程とを地圖に標示せねばならぬとする熱意と努力には敬意を表する。本書に於いて、跋祿迦をHalaurkumとし、凌山をMuzart P.として考證してゐるのは、興味深い。しかし群小國名の、如何にも見事な解明は、唐音と現代音との何等かの相似に基礎を置くものの如きも、吾人を說得するに足る積極的證據の見られないのは、最も遺憾とする所である。

2、數量的方面。

著者は印度の國俗踰繕那は小程三十唐里であるとし、從つて地方傳來の踰繕那數を、三十倍したものを玄奘は記してゐると考へる。此の事にしてからが先づ問題であるのに、更に我々にとつて、納得しがたいことは、踰繕那とは、玄奘の所謂「自古聖王一日軍行」であり、土地の習慣や、行路の險夷に據り、一定した長さのない事は、著者自ら云ひながら、現代の「精密なる地圖」に依る圖上の距離を引合に出して一踰繕那の哩數を計算してゐる事である。

以上で本研究の批評をほゞ終つたのであるが、最後に本書下卷への希望を述べて、結論に代へる。即ち、本文の校正を嚴にすると共に、現在に於いて最も完備した考異を附し、著者が好む所に從つて、文字を改變する事は自由なるも、其の據る所を明にして、後進をして過らしめない樣にせねばならない。もしかくの如き注意を拂ふとせんか、大正藏經の浩瀚にして、京大本亦入手し易からず、加ふるに我國流布本の殆ど信を置き難くして、わづかに四部叢刊本、國學基本叢書本を以つて、不便をしのぐ現狀に於ては、本「研究」の我國文化に貢獻する所以亦明かであると信ずる。

余は此の方面の古地理に關してズブの素人であり、又生來數理に關しても極めて暗い。加へて編輯子は時日を與へるに一週間を以つてした。著者が最も意をそゝいだと思はれる最後の二點を充分に精査して述べる事の出來ないのは極めて殘念である。

〔松村慈孝〕

北京西郊石景山から漢代の遺物

舊臘以來北京西郊石景山製鐵所構內の工事場で、續々古めかしい土器が發掘されてゐたが、今回小野勝年氏の實地調査を得て前漢時代の遺品たることが確認された。

出土品は大部分瓦製の明器で、壺、鼎、鉢等であるが、その多くに博山形の蓋がついてゐることが興味をひき、その他五銖錢、銅製の化粧刷子の柄、內行花文精白鏡の破片なども發見されてゐて、それらは前漢時代の樣式を充分にあらはしてゐる。

なほこの他同工事場附近の黃土斷崖から二列の磚壁があらはれ、そこから王莽の「大泉十」二枚が發見されてゐる點よりみて、これは後漢頃の墳墓の羨道に當るものと解され、もしその奧に玄室でも殘つてをれば更に興味深いものと今後の調査が期待されてゐる。

北京近郊にこの種遺蹟のいまだ學術的調査をへない今日、貴重な資料を提供するものである。（三月十三日付「東亞新報」夕刊より）